

前橋空襲を ミュージカルで

「前橋空襲の悲劇を風化させない」——。戦時下に生きた若者や街の描写を通して、戦争の不条理と平和の尊さを訴えるミュージカル「灰になった街」が8月2日(土)・3日(日)に公演されます。この作品は出演者全員がアマチュアで構成された市民ミュージカル。未経験者が多い中、1年間に約70回の練習を重ね、3時間を超える舞台を作り上げています。また、今年は前橋空襲の体験者などの証言を集めた冊子「前橋空襲体験談」を来場者に進呈します。

まえばし市民ミュージカルの歩み

平成26年	市民ミュージカル発足
平成27年	「灰になった街」上演（戦後70年）
平成29年	「ウォー・アイニー」上演
令和元年	「鎮魂華」上演
令和5年	「灰になった街」再演
令和7年	「灰になった街」再々演（戦後80年）

過去に上演した市民ミュージカルでのひと幕

若い人にこそ見てほしい

まえばし市民ミュージカルは、出演者を固定せず、毎回7～8割が新たに参加するメンバーで構成されています。発足から10年が経ち、関わる人の輪が広がっています。

戦後80年もの間、平和が続いてきたことは喜ばしいこと。しかし世界では、力による現状変更のニュースが絶えません。10年前の初演パンフレットに記した「2015年は戦後ではなく、戦前だったと

いわれる日が来るかもしれない」という言葉が、今まさに現実化しています。

「空襲をミュージカルでやる意味があるのか」と問われることもあります。戦争は重く、扱いが難しいテーマですが、歌とダンスの力で和らげ、観客に届けられるのがミュージカルの魅力。笑いや涙、感動があるエンターテインメントとして若い世代にも伝わる力を持っています。

戦争の記憶を受け取り次の世代へ

冊子「前橋空襲体験談」の取りまとめを担当しました。ミュージカル出演者が空襲体験者に話を聞き、30人ほどの証言を集めました。本人の体験ではなく、聞き伝えられた内容も含まれています。証言をまとめる中で、「ミュージカルで演じていることが、この街で本当に起きていたんだ」と実感しました。

前橋で空襲があったことを知らない人は多く、私自身もミュージカルに参加す

るまで知りませんでした。

学校の授業ではあまり触れられない地域の戦災の歴史を知り、次の世代に伝えていくことは大切なこと。戦争体験者が少なくなっていく今、その記憶を受け取り、伝える意義は大きいと思います。



手紙がつないだ記憶

戦地から妻に宛てた 軍事郵便が語る家族の絆

戦地から前橋の妻宛てに送られた100通近くの軍事郵便。そこには、妻や幼い息子2人を想う父親の姿を見ることができます。

本資料は、旧あたご歴史資料館から本市に寄付され、本市や前橋空襲と復興資料館検討委員会委員長・手島仁さん、前橋学市民学芸員らによって調査・翻刻されたものです。前橋空襲と復興資料館で展示されているほか、『前橋学ブックレット第40号』にも掲載されています。

代田秋造さんは昭和16年に33歳で出征し、旧満州などを転属した後、昭和19年4月にニューギニアで戦死しました。出征当時、妻の房子さんは28歳、長男の知之さんは3歳、二男の昌弘さんは1歳でした。秋造さんから妻宛てに送られた手紙には、家族を気遣う言葉が綴られています。

二男の昌弘さんがその手紙の存在を知ったのは母の死後。60歳を過ぎた後のことでした。「異国の戦地で大変な状況の中、家族を心配させないように『自分は大丈夫』と綴られた手紙に、家族への想いを感じました。戦況が悪化するにつれ、父・

七世松本幸四郎の 想いを受け継ぎ、再び舞台へ

松本幸四郎さん・市川染五郎さん 親子が『橋弁慶』を熱演

7月27日、昌賢学園まえばしホールで、前橋空襲と復興資料館の開館を記念した「前橋歌舞伎舞踊公演」を開催しました。本公演では、前橋空襲から約2ヵ月後の昭和20年10月に本市で開催された「戦災前橋復興舞踊大会」で披露された『長唄 橋弁慶』が、松本幸四郎さんと市川染五郎さん親子によって再演され、観客を魅了しました。

この演目は、幸四郎さんの曾祖父・七世松本幸四郎が前橋で演じたもの。今回の舞台はその歴史を受け継ぐ公演です。

昭和20年10月に開催された「戦災前橋復興舞踊大会」の映像は、関係資料とともに前橋空襲と復興資料館内で展示されています。



1 軍事郵便 2 代田昌弘さん 3 出征前に撮影された家族写真。左上から時計回りに、秋造さん、房子さん、昌弘さん、知之さん。

秋造の苦渋もにじみ出てきます。ニューギニアに渡った後には、『日本に帰りたい』という心情も吐露されていました」

空襲により住まいを失い、母と子で必死に生き抜いた記憶とともに、昌弘さんは「戦争で得られるものはない。もう二度と繰り返してはいけない」と話します。

（出典：『前橋学ブックレット第40号 前橋空襲・復興と戦争体験記録シリーズ2 出兵兵士・代田秋造から妻・房子への手紙―軍事郵便を読む―』令和6年発行）第40号】



松本幸四郎さん

曾祖父・七世幸四郎が演じた『橋弁慶』を伴・染五郎と勤めることができましたことは、曾祖父のご当地・前橋への感謝の思いと、前橋の皆様の温かいお心が、私たちをこの舞台上に立てさせていただいたと強く感じています。芸を受け継ぎ、心を受け継いで舞台に立ち続けます。前橋の皆様に幸せが訪れますよう祈念しております。



市川染五郎さん

この度は、「前橋歌舞伎舞踊公演」にて『橋弁慶』の牛若丸を勤めさせていただきました。空襲からわずか2ヵ月後の昭和20年10月、高祖父・七世松本幸四郎が、歌舞伎の力、エンターテインメントの力をもって前橋の人々へ勇気と希望を届けた催しを、父とともに現代に甦らせ、時空を超えた魂をお届けしようと、願いや祈りを込めて演じました。また、様々な文化や歴史が息づく前橋で、私達高麗屋の精神を刻ませていただいたことは大変嬉しく、前橋の皆さまに改めて感謝申し上げます。今回の公演が皆さまにとって、現をわすれ夢をみていただくひとときでありましたら幸いです。